

一 転校初日

転校一日目の朝、わたしは先生のあとについて、長いろうかを歩いた。前の学校よりも、ろうかがずつと長く感じられた。教室の前を通るたびに、中から知らない子たちの声が聞こえてくる。わたしは何度も、自己紹介じこしょうかいで言うことを頭の中でくり返した。

「ここが、ゆいさんのクラスよ」

先生が戸を開けると、知らない顔がいつせいにこちらを向いた。わたしはスカートのすそを、ぎゅつとにぎりしめた。

「今日からこのクラスの仲間になる、ゆいさんです」

先生にうながされて、わたしは黒板の前に出た。三十いくつの目が、じつとわたしを見ている。顔が熱くなって、ひぎが少しふるえた。わたしは緊張きんじょうで、先生の声もよく聞こえなかった。

「……ゆいです。よろしくおねがいします」

好きな本のこと、飼っているねこのことも、話すつもりで用意してきた。けれども、声がのどのおくでつかえて、それ以上は出てこなかった。小さな拍手はくしゅの中、わたしは下を向いたまま、教えられた席についた。となりの席の女の子が、ちらりとこちらを見た。

昼休みになると、みんなは校庭へ出ていった。わたしは席にすわったまま、心細くてたまらなかった。校庭からは、楽しそうな声が聞こえてくる。前の学校なら、今ごろは図書室で友だちと本の話をしている時間だ。ノートを開いて何かを書くふりしても、えんぴつの先は同じところをなぞるばかりだった。

足音がして、となりの席のみおがもどってきた。朝、こちらを見ていた子だ。名札には、みお、と書いてある。

「ゆいちゃん、ドッジボール、一人足りないの。いつしよにやらない」

わたしは顔を上げたが、すぐには声が出なかった。

「……わたし、ボール、あんまりうまくないよ」

「だいじょうぶ。わたしだって、すぐ当てられるもん。わたしもね、三年生るとき、この学校に転校してきたの。最初の日、ずっと自分の席にいて、だれかに声をかけてほしかったんだ」

みおは、ほおを少し赤くして笑った。

胸の中で固まっていたものが、すつとほどけていった。みおも、わたしと同じ昼休みをすごしたことがあったのだ。うれしいのに、前の学校の友だちの顔が急にうかんで、目のおくが熱くなった。わたしはあわてて、まばたきをした。

「行く」

ノートを閉じて立ち上がると、窓の外で雲の切れ間から日がさして、校庭の白い線が光って見えた。わたしはみおのあとを追って、階段をかけおりた。下から、みんなの声が近づいてきた。

一 転校初日 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

二 初めての塾のクラス

健太^{けんた}が塾^{じゅく}に通い始めて、今日で三回目だった。学校の友だちはだれもいない、知らない子ばかりのクラスだ。

教室に入ると、ほかの子たちはもう席について、問題集を開いていた。だれも健太のほうを見ない。健太は小さくせきばらいをして、自分の席にすわった。となりの大輝^{だいき}は、えんぴつをくるくる回しながら問題を読んでいた。まだ、ほとんど話したことはない。

授業が始まると、先生の説明はとても速かった。黒板の式を写しているうちに、もう次の問題に進んでいる。学校の授業とは、まるでちがった。まわりからは、えんぴつの走る音だけが聞こえる。健太は、自分だけが取り残されていくようで不安だった。消しゴムを持つ手に、じつとりとあせがにじんだ。

最後に、算数の小テストが返ってきた。十問のうち、正解は三問。赤いバツが、ページの半分以上をうめている。健太は答案を二つにおつて、急い^{つゝ}で机^{つくえ}の中におしこんだ。

休み時間になった。前の席の子たちが、さっきのテストの答えを言い合っている。七番はかんたんだった、という声が聞こえた。健太は窓のほうを向いた。外はもう暗く、ガラスには教室の明かりと、うつむいた自分の顔がうつっていた。

「それ、さっきの小テスト」

大輝が、机の中からはみ出した答案のはしを指さした。

「……うん。三問しかできなかった」

健太は、大輝の顔を見ないで答えた。耳まで熱くなるのがわかった。はずかしくて、このまま帰ってしまいたかった。

大輝はかばんの底をぐそぐそさがして、くしゃくしゃの紙を一枚取り出した。赤いバツが、ずらりと並んでいる。

「ぼくが四月に入ったときの、最初のテスト。ほら、ゼロ点。最初はみんなそうなんだよ。ここの問題、学校とやり方がちがうから。ぼくなんか、一か月は毎回泣きそうだった。でも、わからないところを先生に聞きに行っていたら、だんだん解けるようになったんだ」

大輝はそう言つて、歯を見せて笑った。

健太は思わずふき出した。ゼロ点の答案を自慢^{じまん}そうに見せる大輝がおかしくて、それなのに、のどのおくがぎゅつとなった。できないのは、自分だけではなかったのだ。健太はほつとして、肩^{かた}から、すつと力がぬけていくのがわかった。

健太は机の中から答案を引っ張り出し、しわをのばして大輝の前に広げた。

「この三番、どうやるの」

「ああ、それはね、図をかくんだよ」

大輝がイスを寄せてきて、答案のすみに小さな四角をかき始めた。健太は、その手もとをじっと見つめた。さつきまで速すぎた先生の説明が、少しずつ頭の中でつながっていった。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。
